

三毛猫母さんの話

大沢悠馬

ある日、朝起きると、うちの庭石の上に紅鯉が乗っていた。

冬の冷たい空気の中、鮮やかな赤い身を見せている。

今年も来たか。

それは二十五年程前の事だ。今思い出しても賢い猫だった。

我が家は当時から猫好きだ。ヒト四人に対しネコ十匹が同居していたこともある。今までに通算十八匹の猫と暮らした。

放し飼いにしているので度々帰って来ない時がある。行方不明になる度、地方紙に「猫探しています」という記事を掲載するので有名になったらしく玄関に捨てていく人もいる。その度に、またかと思いつながら里親を探してあげる。

近くの商店街の魚屋のおかみさんが欲しいと言ってきた。自宅にネズミが出て困っているので捕らせたいという。魚屋であるからには毎日旨いものをたらふく食べさせてもらえるであろう。でももし、うちの猫がネズミを捕らないタイプの猫だったら？ 猫にも色々なタイプがいるのだ。可愛がってくれるだろうか？ 大事にしてくれるだろうか？

「このおうちには車が多い通りじゃなかったかしら？」「お庭があるといいなあ……」家族会議で選りすぐられたご家庭に貰われてゆく仔猫達。かくして裕福なおうちに貰われた彼らの、上等の革ソファでくつろぐ写真など送られて来るのだった。貰い手がつかず、あえなくボロ屋に居残りとなった、やや容姿に恵まれない猫供の幸せそうな寝顔と見比べつつ苦笑いする。

家の周りを一か月ほどウロウロしていた野良の三毛猫が、ある日仔猫を五匹連れて来たのがその発端だ。大好きだった我々は初めての猫の物珍しさも有り、また里親の探し方もよく分からなかったので全て家で飼い、計六匹の猫家族の面倒を見ていた。食費や病院代など大変だ。母猫の方も仔猫達に付きつきりでトイレの始末や狩りの仕方を教えた。一番どんくさい仔猫には地面から燈籠、燈籠から塀、塀から屋根に、後ろを振り向き振り向き、移動の仕方を教えていた。

三毛母さんは外から茶の間に入って来ると座って、よくみんなのことを眺めていた。

十二月になり暮れも押し迫った日。お歳暮がやって来た。

庭の方から猫の鳴き声があるので見に行った。ちょうど庭の中央にある石の真ん中にお節料理に使う大きな乾燥棒鱈が横たわっており、そのすぐ傍に三毛猫母さんがかしまつて座っていた。状況から見て、近所から失敬してきたと思われた。

母猫自身が食べる様子はなかった。三毛猫一家とすつかり懇意になっていた我々は、いつも世話になっている事への、一家から我が家への心遣いのお歳暮に違いないと言いつつ合つた。

それからすぐ後で「最近この辺りでお魚を盗む猫がいるようです。首輪をしていたよう。お心当たりの飼い主の方気をつけてください」と書かれた回覧板が来て、大いにお心当たりのある飼い主一家は少しびくつきながら、しばらくは三毛母さんの手ぶらの帰宅を待った。

次の年のやはり年末。焼いた鱈が今度は勝手口に置かれ、同じく三毛が横にいてこちらを見ていた。

三年目の年の瀬。

クリスマスを過ぎてもお歳暮は来ない。

仕事納めを過ぎても来ない。

遅い。

おかしい。

忘れているのか？

やはりただの偶然だったのか？

そして大晦日。

猫の鳴き声に庭を見やった朝。

冷々とした空気の中に立派な紅鮭の切り身を見た翌年明けから三毛猫母さんは姿を消した。

どこへ行ってしまったのかなあ。

お母さんはずんぐりとはしているものの、目がとても大きくなかなかの美人猫であって、近所の猫にも人気のように見えた。女優の富士真奈美に似ているではないかと姉が言った。

三毛猫母さんの話

だから高倉健のような雄猫とどこかへ行った可能性もあるのだ。
一緒に過ごした数年間、思えば抱っこしたことがなかった。

あれから十匹余りの猫を飼ったが、あの三毛母さんのように歳暮を持ってくる猫には会わない。

我々家族も、所帯を持ち出て行く、大病を得る、様々だ。日常の細かいいさかい、笑っている時、傍らには常に猫だ。

五匹の子猫達はみな死んでしまった。十九年生きたのもいた。皆頭の良い、行儀の良い猫であった。でもあの三毛猫母さんだけは今もどこかで生きているような気がしてならない。と、庭を眺める。

